
少年少女の冒険記

ぺろろキャンディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女の冒険記

【Nコード】

N5844Z

【作者名】

ぺろろキャンディ

【あらすじ】

人間が知らないだけで、宇宙は3つの世界からできていた。

主人公、山川やまかわ温志あつしは“剣使い”。

妖怪を倒すことに疑問を抱く彼だが、ある日、強く妖怪を恨む少年、冷野シズカ（れいの しずか）と出会う。

2人を取り巻く問題に、さまざまな出会いと奇跡、偶然が重なって
…。

剣使いの住む世界

俺、やまかわあつし山川温志。

ちなみにこう見えて、「剣使い」なんだけど。

剣使い、つてのは…魔力のこもった、剣を使って妖怪を切る、そんなやつらのこと。

宇宙は、3つの世界から成り立っている。

「人間界」「天界」「魔界」。

人間界つてのは、人間とかが住む。

んで、その人間が亡くなると、天界に行く。

そして、俺らが住むのが魔界。

魔界は、天界と対になつてゐるんじゃなくつて。

単に、人間界の…うーん、そうだな「パラレルワールド」的な？

人間、そして妖怪が住む世界。

妖怪と人間は、古くから対立してて…戦いが絶えないでいる。

人間が空気を吸うように、妖怪はガスを吐く。

そして、そのガスがやがて空に昇り…今では、魔界から「青空」は消えていた。

「これは問題だ」

そう判決した魔界の大人たちが始めたのが、「妖怪狩り」だった。

名前のとおり、妖怪を切るのだ。

ま、切るっていつでも、普通の剣じゃあ切れねえ。

「魔剣」で切るんだ。

その、魔剣ってのは、まあ簡単に言えば「魔力のこもった剣」。

そして、その剣を使いこなせるのが「剣使い」ってワケだ。

ちなみにいうと、魔界に住む人間は、「ただの」人間なんかではねーんだ。

「法魔^{ほうま}」を使える。

法魔^{ほうま}ってのは…ま、魔法、って思ってもらって構わない。

生まれたとき、ていうか、先祖代々使える技を受け継いでいるんだ。

例えば、風を起こせる奴がいたり。

動物と話せる奴がいたり。

使える技は、絶対にみんな1つだけなんだけど、まあこれはあくまでも…あんま使わねえな。

妖怪狩りをするとき、妖怪を取り押さえるときとかには使ったりすっけど。

結局、どんな法魔でも妖怪は殺れない。

「魔剣」じゃねえと、なぜーか倒せないだよな、妖怪は。

世界は不可思議だぜ。

いくらガスを吐くからといって。

ただ生きているだけの妖怪を、こんな無残にも殺していいのだろうか。

剣使いだけれど、その疑問はいつにましても晴れない。

妖怪狩り、つてのは魔剣で行うんだけど。

その妖怪狩りにも、本部つてのがあって。

妖怪を切ったとき、自然に魔剣が、その切った妖怪のデータを取る。

んで、そのデータ（魔剣）を妖怪狩り本部に持ってくと…
それ相当の報酬がもらえる。

報酬が出る計算は、かかった時間、妖怪の大きさ、難易度とか、まあいろんなもんを計算するみてえなんだけど。

勉強ばかりは苦手なもんで、よくわかんねえやw

ま、人間がこんだけ妖怪を切ってるわけだから、妖怪だって黙ってはいない。

今まで、何人もの剣使いの命が失われてきた。

…俺の家族も。

妖怪狩りは、8歳から試験を受けられるんだけど。

その試験、つてのに受かると、そこで初めて自分専用の魔剣が渡される。

まー俺は優秀だから…特別に、5歳で試験突破したんだけどww

ま、細かい話は後だな。

とりま、俺がやるべきことは…愛用、腰にぶら下がる程度に長い、この魔剣で…

妖怪、妖狐を倒すだけだ。

妖怪狩り本部

妖怪を倒せば倒すほど、魔剣に残るデータが増えていく。

そのデータが増えて、一定の数を突破すると…魔剣が進化する。

つてもまあ、見た目はほとんどかわんねえんだけれど…魔力の強さ、みたいなのが增える。

すると、つまりは妖怪を倒しやすくなるってことだ。

とりま、妖怪狩りを始めるときは、いつだって本部に先に行かなくちやいけねえ。

でないと、報酬もらえねえから；

何より、報酬はかかった時間も計算される。

時は金なり、ってな……

で、さっそく朝目が覚めて、自作の朝食を食べると(ていうかカツ
プラーメンだけどw)。

直行で本部に向かう。

本部はやっぱり列ができていた。

うーん……時間かかるなあ……

10分くらい待ったところで、やーっと俺の番が来た。

樹里丘「おー、来たか。温志！」

本部で働いているのは、大抵が大人。

んでも、本部にも入試ってもんがあるから……その超難関っていわれ

るテストに合格すると、10歳からなら働ける。

で…。

この、何だか黄土色のマントつけて、これはまあご立派な下駄履いてるオッサンは。

温志「来るに決まってるだろ。ほら、予約頼むぜ」

俺の、亡くなった父さんの親友だ。

小さいころからお世話になっている…そんな人。

樹里丘山登。
きりおか やまの

今じゃ、いい年した（ってか34歳なんだけれども）オッサン。本当、オッサン。

樹里丘「あいよ。ただ今の時刻…8時27分！つと。よし、行って来い！」

本部の用は、妖怪狩りを始めた時刻、そしてその者の名前を保管するだけ。

でもま、報酬もらうときにこれが大切になる。

この世界には、やっぱりいろんな国があるみてえなんだけれども…
近場の本部はここしかない。

ここ、「山里野」やまののっていう所が、俺の故郷、そして生活している村の名前。

隣国の国々と比べても、やっぱり小さい国なんだけれど…いろんな人がいて、楽しいと思ってる。

温志「サンキュー！ンじゃ、即行で帰ってくるわW」

樹里丘「そういつて油断していると危ないぞー。」

温志（わかってるってw）

俺の背中に、樹里丘の声が飛んだけれど、心の中で返しといた。

妖怪狩りは、子供もできるにしても命をも左右する、まあ危険っちやあ危険なことだ。

まあー…

俺みたく運動神経がいい奴なら、怪我なしでできるw

ていうか、俺天才だし…って言っている場合じゃなかった…

考えながらも、森へと入る足を速ませる。

妖怪は、めったなことでは人前に姿を現さない。

妖怪、つつつても皆毛むくじやら、一頭身ってところか。

…今まで、俺が見たことある奴は、だけれど。

でもま、大人たちもそういつてるし、きつと一頭身の同じような妖怪しかいねえだろ。

だから、人間と妖怪を間違えることはまずない。

つかあったら大問題。

…で。

山里野には名前からしてわかるように、山がたくさんある。

それだけ、妖怪が隠れる住処があるってことだ。

まあ…逆に言うと、森と町しかない、みたいな。

町に住むのが人間ならば、森に住むのは妖怪だ。

ちなみにいうと、森や町には…犬やうさぎといった、妖怪でも人間でもない動物もいる。

中には、竜とかもいるらしいけれど…俺は見たこともねーな。

森は結構深いらしいけど、いつも同じコースしか歩いてねえから、迷ったことなんてねえやw

同じ道歩いていても、必ず妖怪は出てくるしなあ…。

1回の妖怪狩りで切れる妖怪の数は、1匹のみ。

つか、魔剣のデータはいくらかでも読み取れるんだけど…何か、一匹切ると魔力がなくなっちゃうらしい。

魔力が無くなったのは、ただの剣でしかないわけで、これじゃ妖怪も切れないわけだ。

妖怪狩りが終わった後本部に行くのは、報酬をもらうためと、ついでに魔力をチャージしてもらったためってトコか。

本部もかなり重要な役割をしているってことだ。

それに、この世界での通貨を作ってるのも、各地の本部だし。

あ、それと。

本部、って一言で言っても、実はほかにも施設があったり。

例えば、病院とか…役所だとか。

まあ、国の大黒柱にあたる所、ってのが本部。

簡単に説明すると、だけどw

で、俺はといつて。

相変わらず急ぎ足で、つか個人的にかなりスピードを出して走って

いるつもりだった。
適当に走ってれば、いつかは妖怪と遭遇できるから。

…正直なところ、妖怪狩りはあまりしたくねえんだけども。

しょうがないんだ、これしか方法は…。

報酬は、大きかったり小さかったりだけれど、1日数回妖怪を切れば、1週間分くらいの生活費は稼げる。

つまりは、親がいなくとも生きていけるってことだ。

妖怪と人間は、はるか昔、同じ生活を共に過ごしていた。

…けれど、1000年くらい前からこの戦い、いや「妖怪狩り」が始まったんだ。

昔、父さんや母さんに聞いたことがある。

「…悲しいことだが…これはもう、運命としかいいようがないんだ」

俺の種族は、動物と話せる種族で。

そのせいか、妖怪の声も聴けた。

動物が大好きだった親は、妖怪狩りを心の奥では批判していた。

「何とかしてでも、この争いをやめさせなくてはいけないわ」

妖怪を切る決心が鈍ったのか、ある日父さんと母さんは…

俺の前から、姿を消した。

俺よりも、はるか遠い場所へ旅立ってしまったのだ。

…俺一人を取り残して。

両親の口癖。

今でもはつきりと覚えている。

「いつか、妖怪と人間が…一緒に笑いあえる日が来ますように」

そういう2人の顔は、今にも泣きそうな顔だったということをお忘れられない。

時は金なり

逃げろ、逃げろ！！

妖怪の声が聞こえる。

でも、それも聞こえないふりで…俺は、さっき見つけたばっかの妖怪の後を追う。

まだ子供なのか、こちらと戦おうとはしなかった。

…にしても。

足速すぎだろ！！

妖怪を追っかけて、それから20分近くは走ってる気がする…

んで…

ようやく、妖怪を追い詰めた。

森の中とは言えど、それにしても木が生い茂っている。

その、自然の驚異に、逃げ道はいつかは阻まれる。

助けて…

妖怪の泣き声。

それも、聞こえないふりをして、小さくつぶやいた。

温志「一瞬だ。悪く思つなよ」

ごめんな、と心で呟いて、たじろいでいる妖怪に…魔剣を振りかざした。

本当に、生まれたばっかの子供だったんだろ。

抵抗する暇もなく、灰が飛び散った。

妖怪は、魔剣で切られると…

吐血の代わりに、灰が舞う。

体が灰でできているのだろうか、ってのはいまだ謎なんだけど。

温志「…帰るか」

自分でそう言って、足をもと来た道に戻す。

この世界では、いつしか「助け合い」、なんて言葉は消えていた。

「自分の仕事が終われば、後は他人事」

あんまりだ。

でも、本当にそうなんだ。

魔剣は1匹しか倒せない。

仮にも、自分が1匹切った後に、誰かが妖怪に追い詰められていたとしても…

助けることなんかできねえ。

だって、自分がやられるかもしれないから。

いつだって何処だって、自分優先…そんな世界になってしまった。

どうしてなんだろう。

っていつても、俺はこの世界に生まれてきたんだから、ああだこうだ言っても仕方ねえけどさ。

妖怪狩りは、まさに「時は金なり」。

時間は金と同じくらい大事、ってか時間が金になるようなもんだ。

早く戻れば、報酬は高くなる。

だからそこ、余計に人に構っている暇がなくなってしまったのか。

とりあえず、俺はもと来た道を駆け抜ける。

…抜け、ようとした。

その時。

??「うわあああ!」

誰かの叫び声が、あたり一面に響いた。

“自分の仕事が終われば、後は他人事”

そう、だけれども…ッ！

また、一つ命が失われるかもしれないのに、通り過ぎるわけには…

いかねえだろ！！

誰かもわからぬ声の方向に、それもどんな妖怪がいて、その妖怪を倒せる確率すらないかもしれないのに…

くるつと、来た道を背中に向けて、叫び声の主のもとに全速力を出していた。

シズカとの出会い

叫び声は、確か…

こっちのほうから聞こえたはず。

足を急がせながらも、あたりをキョロキョロを見渡す。

温志「…やけに静かだな…」

普通ならば、最低限小鳥のさえずりだとか、鹿たちの足音だとか…
何かしら、音が漏れているはずなんだけれど。

“あたりが静かなのは、妖怪がいる証拠”

昔、父さんに教わったっけ。

それに、動物の声すらも聞こえない。

それほど、難易度の高い妖怪が…この近くにいる、ってことか？

もうすでに、1匹切ってしまった魔剣を握りしめながらも、少し足
が緩んだ。

さっきの叫び声…の、奴。

大丈夫かな…。

あたりが静かなのは、先ほどの叫び声、のせいもある気がする…

妖怪にしろ何にしろ、「声」が聞こえるはずだ。

…近くにいるならば。

けれど、ここら辺は…うっそうと静まり返っている。

温志「…何も聞こえねー…」

よく耳を澄ませ、もっと奥に進んでいく。

と。

…ニ…ゲン…キ…コス…

温志「！」

声が聞こえる！

その場に座り込み、声に耳を澄ませた。
すると…今度ははつきり聞き取れた。

ニンゲン…テキ…コロス…

人間、敵。殺す…！？

おそらく、さっき叫んだやつが襲われてんだと思う。

声は…こっちからだ！

今度は正確に場所を突き止めた。

その方向に、猛烈ダツシュ。

ついた先には…

??「…ッここまで…か…っ!」

淡い水色の髪の毛をした、少年…かなりの美少年が、頬や体から血を流していた。

まったく、ほっとけねえな!

すでに、何か技でもだすんだろうか、妖怪が手を振り上げた。
瞬間に飛び出しちまった。

妖怪の信じられないほど固い、毛むくじゃらの手と、俺の魔力充電切れの剣がぶち当たる。

ナニ…ッ

温志「悪いけどなあ。勝つのは俺だ!」

勝つ、とか負けるとかじゃないけど。

一歩誤れば、簡単に命を失ってしまう。

美少年「っ！？だ、誰…」

温志「誰だろうと関係ねえだろ！…っつか、お前が切れ！」

美少年「な、僕が！？…でもその敵は僕にはム…っって危ない！」

美少年に叫ばれなくとも、妖怪の攻撃なんて…俺にはかすりもしねえよっ

妖怪の、意味不明に何本もある手の攻撃を、軽く回避。

美少年（この子…僕と同じ年くらいなのに、この身の軽さ…ただ者じゃない！）

なーんだ。この妖怪…

我武者羅に攻撃してくるだけじゃねえか。

これなら、予測不能…っってこともねえ！

さっと転がって、美少年を後ろにして妖怪の攻撃に構える。

温志「オイ美少年。…相手は我武者羅に攻撃してくるだけだ。俺が攻撃パターンを見切る。…合図したら、お前の剣で何とかしろ」

妖怪は、人間の言葉がわかる。

から、小さな声で呟いた。

美少年「でも…僕には…」

温志「できるかどうかなんて、やってみなきゃ分かんねえだろが！」

つい、怒鳴ってしまった。

そしたら後ろの美少年は黙り込んでしまったけど、とりま…

この、目の前の妖怪の攻撃パターンを見切らなくては。

温志「おりあああ!!」

叫びながら妖怪に向かっていく。

はたから見たら、ただの「馬鹿」なのかもしれない。

見知らぬ他人をかばって、魔力の切れた剣で立ち向かって。

でも。

馬鹿でもなんでも、少しでも役に立てるのならば…
俺は別に構わない。

ガチンッ

と、大きな音を立てて、妖怪と剣が擦れあう。

まったく、どうなってんだこの妖怪は…!!

普通の妖怪ならば、人間同様皮、つつか肉でできてるはずなのに…
剣が…通らねえだど!?

美少年（剣が通らない!?!…もしかしてこの子…魔剣の充電切れじや…）

ガチガチ音を立てても、結局妖怪は無傷のまんま。

けど…大体、わかってきたぜ。

初めに剣と当たんのが、右前の手。

んで、これでもかどぶつかってくんのが、右奥、そして左奥の手だ。

その3本を回避し、初めて当たってくるのが左前の手。

そして、それも回避したら…またループだ。

ガツチャンツ!!

今、あたったのが右奥の手だから…

温志「今だ！左奥へ回れ!!」

上手くいけば、左奥の手の攻撃を…回避できたと同時に、妖怪の心^{しん}まで切ることができる。

そうすれば…！ミッションクリア、ってやつか。

美少年「しょうがないな…ッ」

ぶつぶつ言いながらも、結局美少年が後ろに回った。
まるで、一瞬で。

温志「っ!?!」

…さてよ、この美少年…

瞬間移動でもできんのか!?

そっか、こいつの法魔…

次の瞬間、パッと目の前の視界が開けた。
毛むくじやらの姿は消え去り、灰が風に揺られて舞った。

…そ、つまり成功だ!

温志「いやったあ!」

美少年「ふー…:~:」

俺がガッツをすると同時に、美少年が息をついた。

んで、こっちを向いて軽く頭を下げてきた。

美少年「ありがとう。君がいてくれなかったら、僕は……」

温志「礼なんていらねえって……頭、あげろよ^^」

美少年がゆっくり頭を上げる。

のと、同時に手を差し出した。

温志「俺、山川温志!……お前は？」

俺の手を、強く握り返して美少年がニツ、とわずかにも笑った。

美少年「僕は冷野シズカ。……よろしく」

美少年ことシズカは、透き通った瞳をしていた。

本部への帰り道

本部へ帰るとき、どうせだからと言って、シズカと一緒に歩いて帰ってきた。

シズカ「いや、でも本当…驚いたよ…誰かが助けしてくれるなんて…」

なんて言いながらも、

シズカ「ありがとう…。」

って礼を言われた。

温志「べっつに〜^^。俺は大したことしてねえよ。」

シズカ「そうかな…あ、そういえばキミ…」

シズカが、不意に俺の剣を見る。

シズカ「…魔剣、充電切れでしょ…。」

温志「ん？あ、そうそう。」

なんとなく返したら、真っ青な顔で、

シズカ「すっごい無茶をするんだね、キミって……。まあ、助けられただけあって、何を言うつもりもないけど……」

と言われてしまった……

温志「まー；妖怪狩り、なんて無茶の塊りだろw……っていうか、何で充電切れってわかったんだ……？」

そっぴやそっぴ、と疑問をあてる。

と、答は簡単だった。

シズカ「え、だって。充電切れの魔剣、って……妖怪切れないでしょ」

……え……^^；

温志「んじゃ、もしかして……妖怪って、元々あんな固いのか……さっきの妖怪がたまたま固かったんじゃなくって……」

シズカ「……知らないの……？」

なんか、バカにされる、っていうよりも……心底驚かれた……

どうやら、シズカって…天然…；？みたいだな；

温志「そっか…今まで、充電切れになってして切ったことねえから…初めて知った…」

シズカ「…；…；（それにしても、この子…；）でも、本当…機敏な動きだったね^^。羨ましいよ」

温志「え、マジでw嬉しいー!!」

よく、樹里丘に言われる。

樹里丘「お前は調子にすぐ乗るから…；。」

だって、嬉しじゃねえかw w

シズカ「…僕とは…大違い」

急に、シズカの声のトーンが下がった。

温志「??そうか?…あ、だってお前瞬間移動の法魔…」

シズカ「あれはあくまでも、法魔。…僕自身は…」

…ピシヤリと言いつ返されてしまった。

温志「…シズカ、何かあったのか？」

視線は前に移したまま、静かに口を開いた。

シズカ「…え…？あ、ごめんっ；」

何でも無いような顔に戻ったシズカは、若干無理して笑っているように見えた。

温志「あー…いや…」

一回、間をおいて続ける。

温志「無理に話せとは、いわねえけどさっ…俺ら、友達だろ？」

シズカ「！…友達…」

温志「あ…悪い、今日会ったばかりなのに…馴れ馴れしい…？」

…;

ちよつと自信なくなってきた；

いつも、樹里丘とバカみたいに冗談言い合っていたくらいだから…

「友達」なんて、久しぶりか？

…元々。

この世界には、「仲間」って言葉すら…みんな忘れ去っている。

自分のことで、精一杯なんだ。

…でも、この里の長、「神咲浩介」かみさき しげすけ、通称カミサキ様が、俺と同じ
考えだっということが唯一の救いだ。

カミサキ「どの世も戦いくが絶えぬの…。厚保あつひの子よ。いつ何がどこで
起きようと、これだけは忘れるな」

“仲間を捨てるではないぞ”

山川厚保。俺の亡くなった父さんの名前だ。

父さんと母さんは、里でも有名な…強い魔剣使いだったらしい。

だから、その2人の子、って意味で俺は注目を浴びていた。

カミサキ「厚保の子…。いや、温志よ」

カミサキ様は、どっか他の奴らと…違った。

いや、ちょっとやそつとじゃない。

俺を見る目が、まず違う。

…ちゃんと、見てくれるんだ。

「いいなあ、七光り」

「親が強かったんだから…」

そんな適当な理由で、カミサキ様は俺を見たりしなかった。

カミサキ「強さとは、自らの力で生み出すもの…。」

カミサキ様は、不思議な人だ。

村の人たちは、カミサキ様は、もう何百年も生きている、と噂しているくらいだ。

シズカ「…いや。友達を越した…仲間だよ^^」

温志「そ、つか…！よかったあ^^」

なんて話して。

本部向かう途中、いろんな話をした。

…時間を、忘れるくらいに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5844z/>

少年少女の冒険記

2011年12月29日15時51分発行